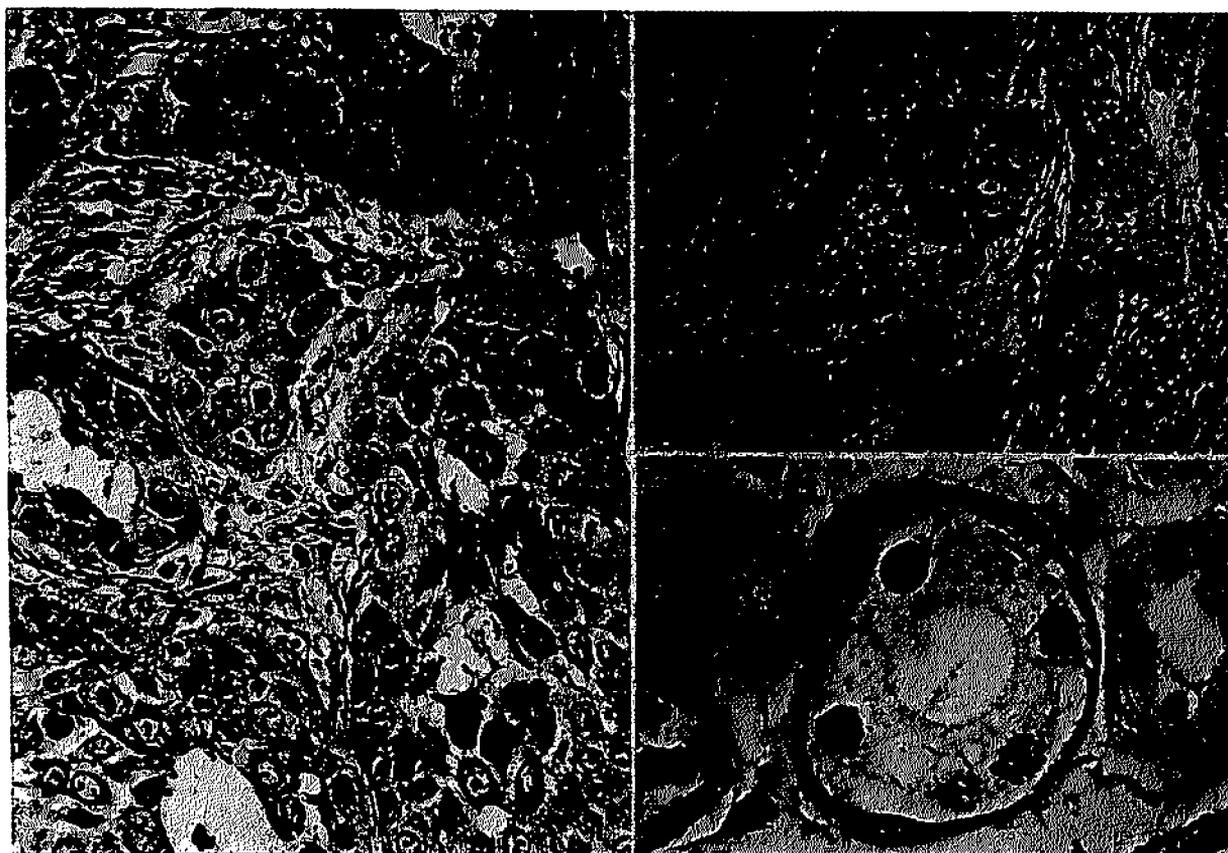


副鼻腔原発(?)有棘細胞癌, 並びに汗腺上皮細胞質封入体形成

北海道大学獣医学部比較病理学教室出題

第19回獣医病理学研修会標本No.304



出題標本：馬の鼻甲介洞を覆う顔面皮膚の生検送付材料, H-E染色標本。

臨床並びに肉眼像：日高地方飼育の11.5歳のサラブレッド牝馬。1978年8月中旬初診。鼻漏排出。9月18日, 前洞, 上顎並びに鼻甲介の各洞に円鋸術を施した。鼻甲介洞 (sinus conchofrontalis) は帯赤色の, 結合織性の感を与え, 弾力性を有する, 比較的硬い新生組織で充満し, 多少の空隙しか持っていなかった。他の2つの洞は健常に見えた。術部の何れも皮膚・皮下・骨膜に異常を欠いていた。術部の皮膚は何れも縫合されなかった。

円鋸術後, 鼻甲洞部顔面が次第に腫脹。10月22日, その腫脹は鼻甲介洞新生組織が円鋸孔を通して皮下に浸潤性に増殖したことに起因するものと判断された。同日, 生検の為, 鼻甲介洞と皮下の新生組織を夫々小片採取。

組織像——診断：(1) 鼻甲介洞原発(?)の有棘細胞癌；(2) 汗腺上皮細胞の変性並びに好酸性針状ないし桿状細胞質封入体形成。有棘細胞癌腫性増殖(Figs.1 & 2, H-E, $\times 266$ & 111)：上皮性腫瘍細胞の索状増殖が前景に立つ；頻繁に有糸分裂を示す。腫瘍細胞は基質内に単個性に孤在することもある。腫瘍細胞素は基質との間に基底膜状の限界構造を持たないように見える。腫瘍細胞素は時折腺腔様空隙を形成する。腫瘍細胞個々は広い細胞質と大きめの核を1ヶ, 稀に2ヶを持ち, 大

小様々な1あるいは数ヶの核仁を持つ。核はむしろ核質に乏しい。細胞質は多数の小空胞を持ち, 疎密様々な好中性ないし好酸性の張原繊維を持つ；張原繊維が疎なる時は, 細胞質は概ね不規則細網状像を示す。張原繊維が密なる時は, 個々原繊維が好酸性度を増し, 細胞質は好酸性, 然らざる時は細胞質はむしろ弱塩基性を示す；腫瘍細胞の大部分は後者から成る。腫瘍細胞はしばしば単個性孤在性に不全壊死に陥る。汗腺 (Fig. 3, H-E, $\times 1,025$)：上皮細胞は水腫性変性, 稀に硝子滴変性に陥る；核濃縮を示すことも稀でない。弱好酸性の, 針状な桿状の封入体を概ね1本細胞質に含む上皮細胞が時折見出される。封入体の長さ, 太さは様々で, 最長 $10\mu\text{m}$ 位；稀に球状のものも見出さる。封入体は柔い感じを与え, 屈折性は非常に弱い。封入体は核濃縮を示す細胞に見出される傾向を持つ。封入体の本体は, それがウイルス性であるか否かということをも含めて, 不明である。そして封入体と腫瘍発生との関係も判らない。その他：腫瘍基質をも含め, 炎性変化が主として間質に見られる。それは円形細胞・好中球浸潤, 血管間葉系の動的活性化などからなる。神経束には水腫, 膠原繊維増殖, あるいは軸索の膨化が見出される。毛根のあるものは毛球水腫を示す。